

# 日中両国における外国見聞記の収集整理と対比分析に関する実践的研究

## A Comparative Analysis of Travel Journal in modern China and Japan

銭 国紅<sup>1</sup>, 井田 進也<sup>1</sup>, 山本 周<sup>2</sup>, 趙 怡<sup>1</sup>, 張 玉萍<sup>1</sup>, 山口 美幸<sup>3</sup>, 平山 桐香<sup>3</sup>, 金井 睦<sup>3</sup>

<sup>1</sup>比較文化学部比較文化学科, <sup>2</sup>長崎県立大学, <sup>3</sup>人間文化研究科言語文化専攻

キーワード：相互理解, 世界認識, 自国認識, 近代化, 東アジア比較

### 1. 研究の目的

21世紀に入って日中両国は互いにとってますます重要な隣国になりつつある。しかしながら、教科書問題などの例に見られるように、両国民の相互理解の間にはさまざまな誤解や齟齬が生じていることも、またしばしば指摘されるところである。両国民が依然として相手国に対する無理解や不信感を払拭しえないとすれば、両国民にとっての損失は政治経済的な分野のみにとどまらないであろう。標記の課題は、このような現状の改善にいささかなりとも資するため、非西洋国家の近代化をともに経験した日中両国が、どのようにして世界認識や自・他国認識を形成してきたかを跡づけ、両国が近代化に向けて歩んできた道程を資料に基づいて互いに提示しあえるための基礎作業を行おうとするものである。

### 2. 活動実施報告

7月上旬、『米欧回覧実記』の漢文体についての共同検討会を実施。8月上旬、院生とともに中国南部珠江三角洲を訪れ、辛亥革命前後に活躍した容闈、孫文、康有為、梁啓超の足跡と見聞記録をめぐる調査を実施。8月、研究協力者による『米欧回覧実記』についての検討。10月 研究協力者による『米欧回覧実記』についての検討。11月上旬、中国人による世界見聞録をめぐる調査を北京、天津に実施。北京において、北京師範大学に留学中の院生と会合。11月8日、多摩において、本プロジェクトによる公開講演会を実施。北京大学歴史学部教授王曉秋氏が清末中国における欧米使節団』を題にして講演。『下旬、『米欧回覧実記』の漢文体についての共同検討会を実施。1月、研究協力者による『米欧回覧実記』についての合同作業を実施。3月、研究協力者による共同検討と報告会を実施。

### 3. 研究目標の達成状況

7月30日(土)～8月7日(日)、清末改革と辛亥革命の関係者の記録と足跡を広州市、中山市において調査した。

広州には、中山記念堂、広東省図書館を訪問、中山市では、孫中山故居、そして清末の知識人である康有為故居(広東省仏山市南海区)、そして日本とも縁の深い梁啓超故居(広東省中部新会市)を訪れ、孫中山、康有為、梁啓超が残した記録や足跡を調査し、その少年時代の受けた教育や生活環境、そしてそれぞれの知識構造に対する外部の影響(欧米、日本)、伝統文化の影響などが、実際にどう各自の思想形成に機能し、作用しているかを探った。

そして日本の外国見聞記の代表格である『米欧回覧実記』(久米邦武、全五巻)の読解と分析を始め、特に東アジアの外国見聞記における漢文表現のあり方を中心に研究を進め、多方面にわたって視点と分野を跨る総合分析を加えた。

米欧回覧実記との対比において、重要な資料価値を持っている清末中国の欧米訪問記のものとして、未発見とされる新しい資料の発掘の可能性をさらに求めて、11月から北京などの図書館や博物館への研究調査を実施し、資料の入手に際して、資料所蔵の状況と入手可能な見通しを確認した。

### 4. まとめと今後の課題

本研究は近代初期の日中両国で刊行された欧米見聞記の内容について総合的な検討と分析を加えるものである。具体的には大妻女子大学の専任教員や院生とその他の日中両国の研究者が相携えて国際的共同研究を行うものとする。したがって本研究の遂行に当たり、特に効果的と思われる工夫の一つとして、個性豊かな多方面の研究協力者のアイディアを十分に生かすことをあげられよう。

本研究は資料の収集・整理とともに資料の対比

分析を行いながら、従来日中両国で別々に保管され、研究されてきた各種の外国見聞記を同じ視点から分析することにより、独自性と斬新さを追求する。このような作業の副産物としては、外国見聞記に留まらず、他の分野やジャンルの文献整理や発掘に波及効果を与えることも考えられる。一例を挙げれば、東アジアにおける儒教伝統と近代社会との関係は、今後新しい視点から再考察されるテーマになりうるものだが、本研究はこうした広い意味での東アジアにおける対比研究の進展に寄与し、方法論的な模範を提供しうるものとなる。

本研究は、去年、資料の整理収集や漢文表現を中心に調査し、検討してきた。だがアジアにおける同時代の西洋認識の比較作業は、まだまだ不十分であるので、次年度の中心課題となる。

## 5. 研究成果

11月8日（火）午後1時から大妻女子大学多摩キャンパス（東京・多摩）で、北京大学の王曉秋（おう・ぎょうしゅう）教授を招いて、講演会が開かれた。

講演会は平成 23 年度大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクト「日中両国における外国見聞記の収集整理と対比分析に関する実践的研究」の一環として行われるものである。講演会のテーマは「清末中国における欧米使節団」、コメンテーターは張玉萍女先生（大妻女子大学非常勤講師）／趙怡先生（同大非常勤講師）となり、司会は銭国紅が担当した。講演会へ出席者は 100 名近くで大妻女子大学の学生と教師が主となっている。

11月5日、銭国紅が南開大学日本研究院において大学教師と院生に向かって『文化転型と中日近代化』を題に、学術報告を行った。